

自宅で竹細工の製作にうちこむ響さん 有馬籠を守る最後の響さん



有馬の竹細工

黒部 亨〈作家〉

神戸の保養地「有馬温泉」は、全国一千余の温泉中いちばん古く、神代の昔に発見されたといわれている。くだって神亀元年（七二四）に行基菩薩が仏教信仰を基礎に温泉の効能を宣伝するため一寺三院を建て、医療施設の施業院に病人を収容したという記録がある。

しかし有馬はその後衰微し、仁西上人によって復興された。すなわち大和国高原寺の住職だった仁西上人は、建久二年（一一九二）二月、奈良の吉野川上から平家の一門といわれる人たちを伴って有馬（湯山。明治二十九年有馬町と改名）に至り、薬師如来の十二神将を表示す

る十二坊舎を建設、ここに一人ずつ十二人の有能な人物を配して、浴客の世話や温泉の管理にあたらせた。

これが現在の有馬温泉のはじまりで、「〇〇坊」という特殊な旅館名が多いのはこのためである。

仁西上人有馬入りのとき、高原の木地屋たちが何人か随っていた。直接には坊舎建築のためのすぐれた工人たちだったが、その後土地に定着してひき物細工、竹細工などを製作するようになり、やがてこれらが有馬特産となつて全国に知れわたることになる。

中でも特に名の売れたのが「有馬籠」と「有馬筆」である。

その前に木地屋についてざっとのべておこう。別名ろくろ師、木地ひき、ひきもの師ともいう。轆轤（ろくろ）を使用して円形のくりもの木地を作る工人のことで、特殊職人としてその歴史は古い。轆轤は今までこそ電力を使用しているが、往時は回転軸に革ひもをまいて手で引く形から足踏式に移り、ついで水力を用いて回転させるようになった。

木地屋の大部分は良材をもとめて山中深くはいり、村や町とは隔絶した集落生活を送った。良材が



店内には譽さんの手で作られた作品が並べられている

尽きると他へ転住するわけで、特異な職業集団の構成をもつ渡り職人たちであった。彼らは神社・寺院の支配に属し、神役奉仕とひきあてに職の免許を得た。一人前の木地職になるには親しく神社に奉仕し、神前で烏帽子式を挙げて職の免許を受けた。

また彼らはその特権を利用して大名領国を超えて自由に山中を移住し、深山の林木を伐って渡世することが許されていたが、近世末になって山林利用について地元村の圧迫が強くなり、明治になって山林所有権が確定するとともに山渡りに終止符がうたれた。

有馬に定着した木地屋たちは、主として竹細工を専門に製造するようになった。

「有馬特産品の籠にしる筆にしろ、いずれも竹製品であるのは、近くに竹材が豊富だったからでしょうね」



余田さんの祖父、九兵衛さんがシカゴ万国博に出品した竹細工が銅賞を得た時の賞牌

栄町に住む郷土史家の長濃丈夫さん(69)はそういう。木地製品にしる竹製品にしる、よい材料がよい製品につながるのとは当然のことで、竹資源の豊かな有馬は古くから竹細工発達の立地的条件に恵まれていたわけである。

百人一首で有名な大式三位の恋歌にも

有馬山いなの(猪名野)笹原風ふけば

いでそよ人を忘れやはする

というのがある。猪名野は六甲山東方の猪名川流域の平野で、昔は見渡すかぎり猪名笹が茂っていた。畿内や関東方面から有馬温泉へ行くとうすれば、どうしても笹や竹の生い茂った荒涼たる猪名野を通過しなければならぬ。

この猪名笹の「新子」——すなわち一年もの二年ものはそれじたい質が柔らかくなめらかなので、花器などを編むにはたいへんよい材料になる。少し足をのばせば良材が無限にあったわけである。またこのあたりの女竹は、有馬籠の特長といわれる上品さがあり、よい味を出すための色合いをふくんでいる。加えて節合(まじり)が長い。節合が長いことは籠作りには重要な条件なのだ。女竹は四つに割って裏がわから干す。もうそう竹ではよい細工はできないのだ。

長濃さんは有馬竹細工が発達したいま一つの条件として「軽い」ことを挙げる。

「温泉客の土産物として、竹籠や筆は軽いでしよう。それに昔の有馬籠などは小ぶりのものがほとんどですから携帯の便、腐敗や変質の心配がない、という点でも重宝だったわけですね」

筆は京・江戸および諸国へまわって売りさばっていた。全国から入湯にきた客たちの口コミも、あつらえむきのPRになったにちがいない。籠類は江戸では店頭で売ったが、京坂ではかついで売った。活花籠、魚籠などいずれも精巧なつくりで、筆におとらず宣伝が行きとどいていった。現在のようなカサの大きな籠類は車の発達とともに出荷されるようになった。



左より余田さん、長瀬さん、筆者（余田さん宅で）

茶華道家元からの特別注文が多い。もちろん一般個人からの注文も多いし、外人の好事家もやってくる。一人ではとてもさばききれない。さりとて助手を雇おうにも、一人前の仕事ができるまでには七年から十年はかかる。だいいち希望者のいないのが致命的である。

「編むまでがいろいろとややこしいんです。竹の購入、乾燥、切断、竹こなしと、いろいろありましてね。ぜんぶ一人でやるんです」。「竹こなし」というのは、竹の表皮と肉の部分分離する作業。竹というものは一度に表皮だけはぎとることができないから、縦に半分ずつ割り裂いていく。肉の部分は不用だから捨てることにし、最後に残った薄い表皮で製品を編んでいくのだが、この分離作業中によく指を切る。

「気の乗らないときによくケガをしますね。たとえば天気の良い日なんか、遊びに行きたいなあと思いがら仕事をしてくるでしょう。そうするとふしぎにケガをしますよ」

だから雨の日は落着いてよく仕事ができますわ、と笑う。機械で大量生産できるものではない。精神を集中し、竹の性質をたしかめながら一つ一つ手仕事でやっていくところに、喜びと苦しみがある。竹の節は編物にとって本来じゃまになるものとされているが、これをうまく利用すると一風変わった風趣が出る。髻さんは一つの花器の中に節が一つしかないという製品を作っているがこんなのはなかなか手まがかるしむずかしい。有馬籠がすぐれた民芸品として高く評価されるのは、要するに丹精こめた手づくりの良さがあるためである。

髻さんの作っている籠製品は茶席用の花器が中心になつている。茶華関係がざつと五十種。一般の籠類を加えると百種あまりある。「家元にも好みがありましたね。

たとえばこの花器は「無心籠」というんです。無心の地で無造作に作った、というわけです。何の変哲もない粗い作りに見えるでしょう。しかし仕事としては粗い竹を使うほど味を出すのがむずかしいんですよ。この籠に

現在、地元有馬で籠作りに励んでいるのは、吉田町の髻幸男さん(31)ひとりだけとなった。髻さんはもと会社勤めのサラリーマンだったが、お父さんが亡くなってからすっぱり足を洗って、父祖伝来の家業を継いだ。はじめのうちは心細くて、これでやっていけるのだろうかと心配したという。若い髻さんにこのような決心をさせたのは、やはり父祖伝来の「血」であったかもしれない。有馬籠の伝統は、いまこの人の二本の腕にかかっているのだ。

店内に一步はいつてみると、正面の壁に

「茶華道各家元 有馬籠御用髻昭竹斎」の標札がかかっている。代々昭竹斎を名乗り、当主の髻さんも第何代目かの昭竹斎として竹と格闘しているわけである。

現在作っているのはほとんどお茶席用のものばかり。

花を挿したときの風流な味がねらいなんですが」

お茶席用の飯器などは一週間に一コしか作れない。炭取籠となると一コ作るのに半月はかかる。花器などは時代を経て竹の色が黄みがかってくるのが値うち物で、一級品となるとずいぶん高くつく。

響さんはきれいに肉を削り取った女竹の茶色の皮を数えてから、鮮やかな手で籠を編みはじめた。竹六本で六角に編んでいく。これを「六つ目」といって、有馬籠の基準とされている。

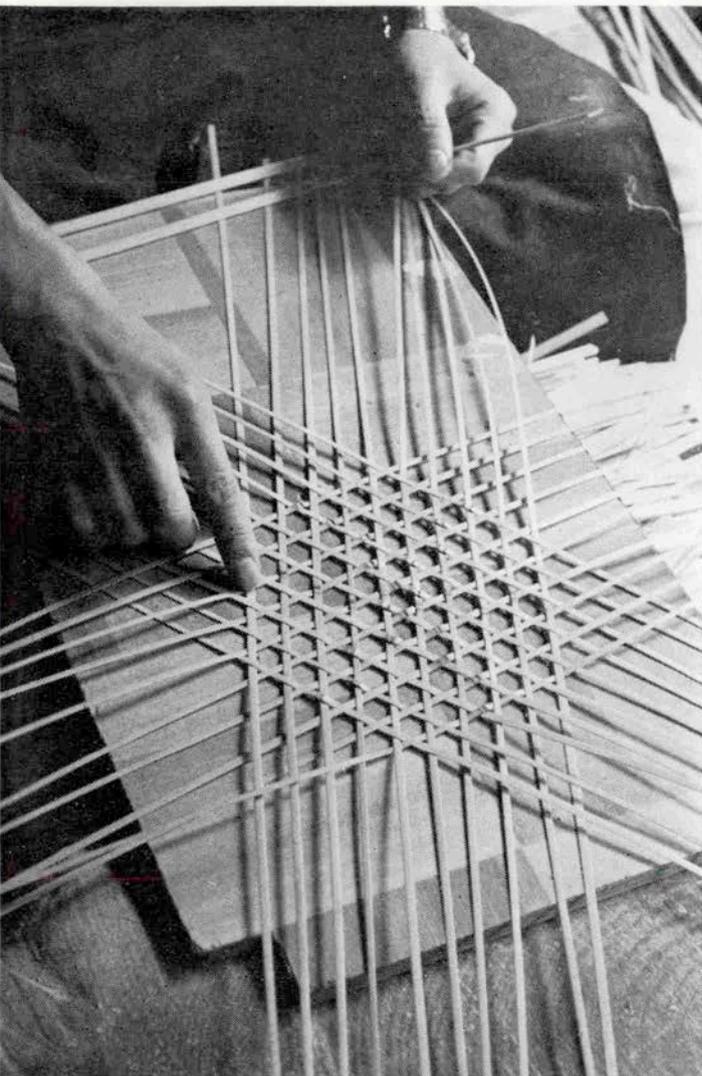
有馬町にはいま一軒、もと有馬籠を作っていた家がある。北野町の余田治夫さん(66)である。

店内にはいってみると、正面の壁にかけてある豪華な賞牌が目撃された。縦一メートル、横一・五メートルはあろうかと思われる枠つき木板に、日・英両文で賞状の全文が彫りこまれ、その文字に金箔が埋められている。読

んでみると、明治二十六年(一八九三)アメリカのシカゴで開かれた万国博覧会で、余田さんの祖父にあたる九兵衛さんの出品した竹細工が見事銅賞を受賞したときのものである。

「受賞した製品そのものは、祖父が直接作ったものかどうかかわからないですよ。当時は大分県や熊本県から、竹細工の修業をしにきた徒弟が多勢いたんです。腕のいい職人がいましたからねえ。わたしの記憶では大正のはじめごろまでいたようです。この有馬の中で徒弟を三、四人抱えている店が二、三十軒はあったでしょうか……。多い家は二十人くらい抱えていましたね」

とすると、大正初期まで有馬は全国的な竹細工産業のメッカだったわけで、他国の湯治客と竹職人たちが町は大いにぎわっていたものと思われる。世界を舞台にした博覧会に出品して賞を獲得するような腕のいい職人は、あながい多勢いたのかもしれない。



スピーディに竹籠が編まれていく。幾何学模様美しい



電灯の下で人形筆作りをうちこむ西田さん一家

竹でこんなものが作れるのか、とおどろく外人が多かったという。

これが当時の製品です、と余田さんが出してみせたのは、いずれも片方の掌に載るほど小さな細工だった。花筒、花立て、千筋（小物入れ）など、外人がおどろくのももともとと思われるほど精巧な作りで、竹の一筋々々は磨きあげられた糸のように見える。こういう細工は日本人の特技である。

最盛期には筆屋六〇軒、籠屋八〇軒といわれた有馬の竹細工は、現在は見る影もなく衰微している。有馬で竹細工の技術を習得し、国へ帰ってそれを家業にしている者が多いというのに、本場の有馬でなぜ衰亡の一途をたどったのか。

その原因の一つとして考えられるのは、第一次大戦後の別荘ブームである。阪神間の保養地としての有馬には好景氣に便乗した財閥たちの別荘が数多く建てられ、土地の高騰によって家屋敷や土地を売り払って離町している者があいついだ。その中にすぐれた職人たちがまじっていたのだ。近代工業地帯に接近しすぎた温泉郷の、当然の運命だったかもしれない。そして現在では良質の竹資源そのものが底をつきはじめているというのが実状なのだ。

しかし、いずれにしても明治の中ごろ、有馬籠は余田さんの祖父九兵衛さんによって、遠くアメリカにも知れわたったわけで、そのせいとかどうか外人の購入者が多かった。

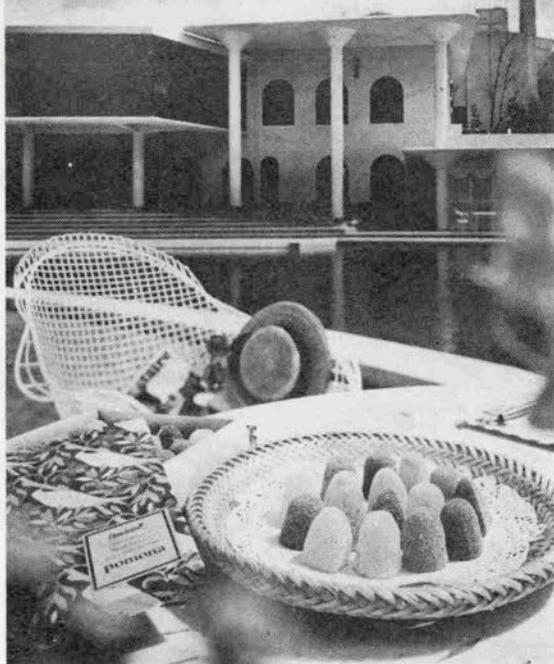
「私も若いころ、クズ籠なんかを作りましたよ。ドイツに輸出していたようです。製品を牛車に積んで有馬街道を神戸に出て、居留地の外人さんに売りに行ったこともありましたな」

有馬には竹製品を作っている家が他に二軒ある。いずれも「筆」である。その一人、有馬町に住む西田徳治さん（80）一家は「人形筆」（別名「子持筆」）を作っている。これは実用品というより民芸品。筆の柄に五色の絹糸で井筒、うろこ、矢絰り、リボンなどさまざまな色模様を巻きあげていく。筆を立てると柄の末口から石こう作りの小さな人形が顔を出し、筆を横にすると柄の中に隠れるしかけになっている。いわゆるカラクリ筆である。

いま一人は上ノ町の山本嘉一さん（78）である。山本さんはかつて本誌で紹介したように、筆作りの祖山本屋四郎兵衛の五代目。十六歳のときから筆作りをはじめて六十余年間、いままお「有馬筆」の伝統を守るために日夜精出しているのは心強いかぎりである。

機械工業の発達によるマス・プロ製品のはんらんとは、伝統的な民芸品をますます片隅へ追いやっていくことは事実である。しかし、だからこそ、長い伝統と技術に支えられたこれらのささやかな竹製品の味わいは、わたしたち日本人の生活のヒダにしみついていく郷愁に、さわかくなぬくもりをあたえてくれるようである。

朝。指さきにふれた新しい季節 ときめきの予感。
さわやかさと出会います。



北海道の香りで真夏の味を！



神戸市生田区中山手通一丁目一五
生田東門筋東門会館ビル一階奥

TEL (31) 七七七〇

北海道郷土料理
蝦夷

●北海道飛行機便の新鮮な
毛がに——二千〜二千五百円
十勝鍋（シヤケのミソナベ）五〇〇円
蝦夷鍋（シヤケのチリ） 五〇〇円
北海道の一品いろいろ 白・鶴三〇〇円
ビール三〇〇円

★神戸っ子待望の 神戸文化ホール 10月1日オープン



神戸駅の北、大倉山に建設中の神戸文化ホールは、いよいよ今秋10月1日にオープンします。

大正10年来の市民の願いであった文化の殿堂として誕生するこのホールは、客席2,000の大ホールと、同じく客席1,000の中ホールのほかに、小演劇や舞踊などにも使えるリハーサル室(約100坪)と、会議室(4室)・食堂(110席)などをそなえております。

大ホールは音楽を中心とした多目的ホール。中ホールは、演劇を主とした多目的ホールで、それぞれ移動式のセリヤ、リヤスクリーンなどの新しい設備が設けられております。

また、市民文化の中心として活動するため、料金も非常に安くされており、気軽に利用できるホールになります。

神戸文化ホールでは、開館を記念して9月16日から月末まで、華やかにこけら落しの催しが行なわれます。

この催しには、市民を無料で招待するよう予定されておりますのでご期待ください。

(市民ホール文化課 岡田美代)

〈開館記念行事〉

9月16日 記念式典。
大阪フィルハーモニー交響楽団演奏。
日本舞踊「寿式三番叟」「お祭」「青海波」……(兵庫県舞踊文化協会)。

9月17日 大阪フィルハーモニー交響楽団演奏。
新劇「虹と落日」……(兵

庫県劇団協議会)。

9月18日 民謡(婦人団体協議会)。
能・狂言(日本能楽会神戸支部・神戸親世会)。

9月19日 民謡(婦人団体協議会)。
アンドルー・ホルデス ピアノ演奏会。

9月20～21日 新劇「女の一生」(文学座)。

9月21～22日 児童ミュージカル「桃次郎の冒険」(劇団四季)

9月22日 邦楽「米朝落語独演会」(桂米朝・桂小米ほか)。

9月23日 パレエ「白鳥の湖」(兵庫県洋舞家協会)。

9月24～30日 映画祭「なつかしの名画」。

9月25日 NHK「歌のゴールデン・ステージ」公開放送。

9月26日 ラジオ関西公開録音。

9月27日 文化講演会(文芸春秋)。

9月28日 サンテレビ公開録音。

9月29～30日 松竹歌舞伎「先代萩・修善寺物語・鏡獅子」(中村富十郎・沢村訥升・阪東好太郎ほか)。

9月30日 母親コーラス。

〈神戸文化ホールの使用料〉

大ホール	平日70,000円 土、日、祝日90,000円
中ホール	平日30,000円 土、日、祝日40,000円
小ホール	平日15,000円 土、日、祝日20,000円

ただし午前9時から午後10時までの使用料。使用時間数により料金は異なる。また500円以上の入場料を取る場合は上記の使用料の150%、1,000円以上の場合は200%に、練習、準備に使う場合はそれぞれ60%、40%の使用料になる。

神戸文化ホール 神戸市生田区楠町4
丁目26 ☎351-3535

★73 神戸まつり お祭りぴーぷる感じるの記



お祭り屋参上
湯口 徹
(市役所)
写真は神戸市長

お祭り屋を拝命し、みなとの祭撤退作戦から神戸まつりを三回。本当にまつりが大好きな皆様方のおかげで、よそに誇れるまつりになったのがうれしい。おまわりさん、テキ屋さんなど、いろんな人たちと仲良くなれたのも……。



神戸美人全員集合ノ
山脇 陽三
(神戸まつり実行委員長)

クイーン神戸。やはり身長は1m六〇以上、容姿端麗、何かチャームポイントをもっている人がいな、審査の時にはパンタロンよ

りミニスカートで来てもらいたいですよ。それともっと話をして内面も知りたいですし……。
(来年度応募する方、右御注意)



チームワークもびったり
荒牧 淑子
(クイーン神戸)

代表クイーンの芝田さんをお姉さん格に、私たち七人のチームワークもびったり。一年間何とか市のお役に立ちたいと思ってます。でもパレードで手を振るのには少々閉口。なれないもので顔がひきつってしまいました。



八面六臂の活躍
米田 武文
(サントビディレクター)

中継カメラの動きがとれなくなるくらい盛大でしたなあ。

中継車の中で左の耳にインカムを入れて、本社との連絡、現場への指示、目は七台のカメラを追うというハードワーク。おかげで左耳が三日間ほどシビレツバナシ……。



レンズの目
米田 定蔵
(カメラマン)

そやけど、せっかくのおまつりに仕事で参加ちゅうのは、つまりませんな。自分が本当に雰囲気にとけこんで、いい写真を撮りたいし、腕章をつけている以上、責任がありますんでね。パレードは仮装行列の延長みたいでしょう。もう一くふうほしいね。



チマチヨゴリを着て

郎 美笑子

(花のプリンセス)

花のプリンセスは民族衣装で登場するんですよ。わたしもチマチヨゴリで参加したんですが、サイドカーの座席に座ると衣装が隠れてしまうので、いすの背の所に座ったんです。座りごこちは悪かったけど楽しかったですよ。



毎度バカバカしいお笑いを……

増本 忠

〔淡路家府総利〕

(神戸学院大学落語学院)

苦勞話？ そんなたいそうなものやおまへんで。去年に比べたらずっと賑やかで結構でしたなあ。まあ、あらかじめ話すネタを考えとったし、マがもたん時はインタビュしたりしてごまかしたし……。

(青年広場の司会ゴクロウサマノ)



オタマジャクシはカエルのコ

上月 倫子

(神戸っ子サンパチー
ム・パレリーナ)

参加人口が増え道路が混んで踊りにくかったこと以外、ナンニモ

言うことないくらい楽しかった。パザールで、丹波から取れ取れのオタマジャクシとメダカを30円で買ったんだけど、オタマジャクシがみんなカエルになったんですヨ。



マーチングマーチ

竹本 幸子

(垂水小学校教諭)

リーダーの子供と一緒にパレードコースを歌いながら歩いてね。ハイ、ここで曲が変わって……という風に練習したんですよ。休日だったので人が多くて恥ずかしかったけど、おかげで子供たちがよく頑張ってくれました。お年玉を貯めて楽器を買ったりして……。本当にいい経験でした。



名付けてバカ騒ぎデー

岩井 啓一

(加羅舎オーナー)

「来年こそは参加するんだ……」そんな方々がどんどんふえています。でも一体何をやるの？「何もしないさ、ただその日だけはバカになるんだ」年に一度そんな一日が神戸にはあるのです。これぞ名付けてバカ騒ぎデー神戸まつりノ(写真はカナディアアンアカデミー)



スリル満点ノ

菅野 芳子

(花のプリンセス)

サイドカーに乗ったんですよ。ビュンビュン走るかと思つたら、急に宙に浮いたりして……。でも不思議と落ちこちそうにならなかったのは、運転が上手だという証拠ですね。



ヘンシーンノ

藤原 保之

(カメラマン)

理屈ぬきで踊りくるう姿なんか魅力あるネ。もつともつと楽しい衣装を自分でつくってカーニバルにふさわしい化身をつくらなくっちゃ。そんなやつたら仕事ほっぽり出して僕も踊りたなるけど。



オマツリダイスキヨ

ジュディ・リン

(神戸在住)

オマツリ、タノシイデス。
ワタシ、ダイスキノ
ミンナ、トモダチネ、
コーベ、トテモスキヨ、
ワタシ、ハッピーネ。



まつりに参加して

上野 康之

(東灘なんでもまつり)

空は青いし海がきれい。山の緑もいいナア。しかし人が多過ぎる。
えっ？ 神戸まつり!!
あれ終ったんじゃないの……？
きのうテレビでた見よ。あのテレビ、すごかったけどなア。ドゥリで人が多いと思ったヨ。



すごいなアー神戸まつりって

吉沢 久

(あっけにとられてた人)

ことしの神戸まつりは盛りあがり
りが素晴らしかった。祭りはやはり参加してこそ楽しい、毎年のように青年広場に出かける。ことしはサンバー色だったが、このリズムは神戸によくマッチしていると感心している。来年は何んとか早くから準備してパレードに参加したいと思っている。



神戸のリズム・サンバ

鈴木 正

(思わず踊り出した人)

カラリと晴れ上った初夏の日ざしを浴びながらアーチをくぐるとなんでも祭りの名の通り舞台で演芸。コーナーで落書、祝酒、植木バザー等盛り沢山の行事と参加者の多いことに目を見はりながら日の暮れるのも忘れるようでした。



“六甲、よいとこ。一度はおいで”

坂本 房子

(産婦人会)

「花と海と太陽の祭典」神戸まつりの前夜祭六甲ファミリーマつりも実に盛大の一語につきた。サンサンたる太陽のもと、実に当日の人数は十二万、王子会場はわきにわいた。神戸一の会場だったろうと自負して喜んでいる。



“来年は中央会場がほしいわ”

山本 清子

(荻合婦人会)

荻合区は中央会場がないのでパレードです。

各商店街、市場を可愛い幼稚園児から子供会、七十歳のおばあちゃんまで延べ三〇〇〇〇人の人が参加し楽しい前夜祭でした。

来年はぜひ中央会場がほしいですね。



ビバ! スワキマノ

西内 修

(諏訪山カーニバル実行委員)

五月十三日「第一回諏訪山カーニバル」が金星台で開催された。生田のヤングの「わかもの」による舞台装置から警備まで多くの若者が参加した。このエネルギーを来年からの神戸まつりで爆発させたいものだ。



“オオ・ハッピー”

石津 武史

(民踊参加者)

パレード、らくがき、パレリーナ。オンブオバケに、ヘアー・シヨ。日本の太鼓も賑やかに、手振り、身振りも面白く、はっぴいひろばの夜は更けて、ライトに浮き出るあで姿。連れの息子を見失ない、顔色変えて、汗かいて、ヤツと見つけて、アア、ハッピー。



“リズム&ファイアー”

芦尾 稔

(長田区若者代表幹事)

長田地区で初めて若者のコーナー「リズム&ファイアー」が設けら

れ、大変好評を得ました。

中でもファアーストームに点火した時は、どこからともなく拍手・喚声がおきました。

GO・GO、サンバなどのリズムにのって、若物の祭りにふさわしい熱気にあふれていました。

楽しい一日でした。



“さすがリトル神戸っ子”

棚倉 敏明

(須磨子供こしの実
行委員)

地域の子供達の手による、彼等の創造力の結集のみこしをかつぐ夢が神戸まつりで実現。現代の子供の作品はテレビの影響が大。童話の主人公、神戸を形どったみこしもありさすが神戸の子供達!!



“団地ファミリーに
大うけ”

松本 周二

(明舞団地連合自治会長)

約一万戸の団地訪問ミニマラソン。二千人のチビッコが工夫をこらしてつくった樽ミコシでワッショイワッショイ。

青空の下の野試合にも二六〇人参加。

神戸の西端明舞団地での一コマでした。



私のイメージは六甲山

柳本 薫

(デザイナー)

ハッピー広場で催されたイメージファッション、色んなテーマがありましたよ。同棲時代、モラル、エトランゼ等、どんな風な洋服になるのやら皆よそさまの気になってソワソワ。

私のイメージは六甲山。モデルが美女なので撮って貰った写真が顔の見える正面ばかり、苦勞した後姿が一つもないとはなあー。なんて思ったり。



目前でやらねば!

古川 清

(ゼロアートタンク)

イメージボックスの中で何と内容の稀薄な祭ではないかと思いましたが。祭やるなら何でもいい。総て市民が各人、自前で金をはたいて汗してやれるもの、やったものが祭ではないでしょうか!



どうしてこんなに

小泉アキコ

(バザール)

どうしてこんなに沢山の若者が神戸の街にいるのだろうか? どうしてこんなにオモシロくて安い商品をつくる連中が集まったんだろう(みんな私のトモダチだから) どうしてこんなに飛びぶように売れるのだろうか?

答・神戸まつりだから……。



売れたのだ!

石川 晴久

(新世紀美術協会グル
ープ員)

芸術広場の売店は前後祭から、手芸品からがらくたといってもよいようなこつと品? まで、売り切れてしまう店が続出した。買う者と売る者が、祭りに参加して、たのしく遊んでいる広場といえる。



“売るアホウに
買うアホウ”

藤原 明子

(バザール)

夜も寝ずに商品つくって、もうかるわけなし、雑踏の中で一日中ホコリ吸いこんで、あなたも好きねえ”と当世流行の言の葉いわれながら、でも買うより売る方が楽しいのです。

また来年も頑張りますよ。



リズムに酔って元気倍増

佐藤 廉

(元町画廊・サンパチー
ム最年長記録保持者)

誰でも参加できるのが神戸まつりのいいところ。とかく参加者が見物人の間にミゾができがちなものだが、トビコミ歓迎のビバノサンバはみんな恥を捨て、年を忘れ、ストレス解消にも絶好。



デナイより
デルほうがエーデ

井上 桂子

(プランニンググループ
ア・クラブ)

衣裳を着て踊っていると、見物している人たちのマがヌけて見える。見に来たなら踊らにヤソンソ。ドロナワ式だったけどグループのみんな、今まで忘れていたような感激を味わい胸がジーン。



踊らにヤソン・ソ

西口 恵子

(神戸っ子サンパチーム)

「踊るアホウに見るアホウ、同じアホなら……」てなわけで、初めてサンバ。フライパンをたたけば足が勝手に動いてくれた。わずかしくないよ。来年はあな

もどうぞ。



デビット・ボウイより
カッコよく

岡田 正美

(ガラシヤ・マスター)

「来年？ もちろん参加しますよ。もう衣裳のデザインも決めたもんね。デビット・ボウイの向こうをはって、今年よりも派手なんやろうとはりきってますよ」

——(ハハハハ74の鬼)



新しい自分を発見

中井 和代

(甲南大学ブラジル研
究会)

自分があんな風にノリにノって踊れるとは思っていなかったの、おまつりで新しい自分を発見したみたい。衣裳が長くなって困ったけれど、サンバはすごく楽しくっていい気もちだった。



踊り踊り疲れて

野田 輝雄

(神戸っ子サンパチーム)

踊りと聞いただけで、からだ中血が騒ぐくらいだから、踊っている時はもう何もかも忘れて楽しかった。来年はもっとステップを研

究し、衣裳も工夫しなければ。次の日試験だったけどさっぱりダメ。



花の恥らも捨てて

西田伊公子

(ぐるーぶ・なに？ぬ
ねの)

毎年、まつりの前日までもういい年だから恥しいとかブツブツ言っているのに、いざ本番になるとなにもかも忘れて一生懸命踊っている。やっぱりみんなおまつりが好きなんです。



年々おもしろくなる

丹羽 英治

(甲南大学ブラジル研
究会)

今年は若干衣裳がサエなかったな。パレードで見物の人たちが押し寄せてきて、まるで身動きがとれなくなったのも頭に来た。それだけみんながノッてきているんだと思うんだ。



“来年も絶対参加”

若間 弘子

(主婦)

思いがけなく、フィナーレのサンバに参加、ワーイ、帽子の天辺

